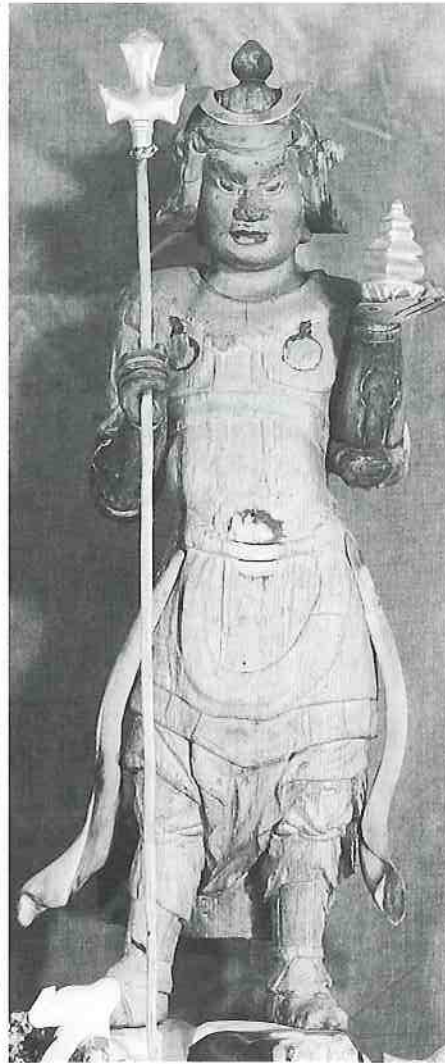


かも 市史だより

平成18年10月
No.14

■編集発行 加茂市幸町2丁目3番5号 加茂市教育委員会内市史編さん室 ☎0256(52)0080 内線480

■ 鶴森薬王寺の毘沙門天立像 ■



像高約六十cm。甲冑を身にまとい、目を大きく見開いて怒りの表情を表し、右手に三叉戟をとり、左手に宝塔を載せ、右足をすこし前にして岩座上の邪鬼を踏んで立つ像です。頭部は一枚(檜)から彫りだして体部の首柁に差し込み、体部はやはり一枚(材質不明)から彫りだし、足先を翹ぎ付けています。両肘から先、戟・宝塔、両腰から体側に垂下する天衣など後補が多いものの、像容を損なうほどではありません。

柔らかい材のためか全体に彫りが浅く磨耗もみられません。甲冑などの表現は丁寧で、腰をやや左にひねって上体をそらす表現もうまく、動きのある均整のとれた像といえます。

造像は中世にさかのぼると思われまふ。あるいは頭・体部で時代が異なり、頭部は室町末期、体部はそれ以前かも知れません。

口伝では、近くの大庄屋(坂井家)の囲い堀から発見され、薬王寺境内に毘沙門堂を建て祀られたといわれています。昭和十二年頃には現在みるように本堂内に安置されました。かつては毘沙門講があり、地域の人々の信仰の厚さを窺い知ることができまふ。

(文化財部会 羽二生寛興)

最後の百姓を生きる

昭和十年代以降、農業は手作業から機械化へと大変革を遂げ、農家の生活は劇的にかわりました。「百姓の次は畜生」といわれた過酷な農業体験をかえりみたら農民の半生の記。

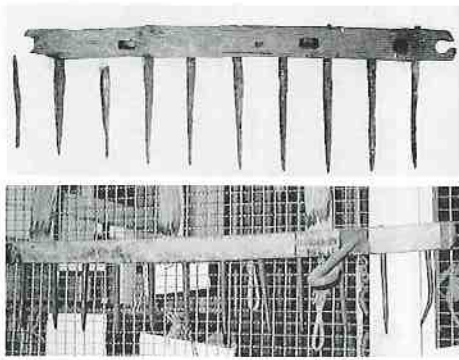
はじめに

私は先輩から貰った雑誌『日本の美術三五七号 古代の農具』で「エブリ」（「えぼり」と呼んでいる）を見て驚いた。弥生時代の農具を俺も使っていた、そして八世紀の馬鋏は、四十年前までは代掻（田植前の土を軟らかく均す）作業の最重要な農具であった。千年も二千年も前と同じ農具で同じ作業をしてきたことになる。そしてこれらの農具も作業も全部過去の物となり、忘れ去られ消滅してしまふ。俺達の世代はまさに百姓の最後なんだなあ!!と感慨深い思いにさせられた。



▲ 弥生時代の「エブリ」※（平鋏）

私は昭和八年生まれである。五才の頃小屋の外に、周囲を編んだ竹で包んだ赤



▲ 8世紀（奈良時代）の馬鋏※（又鋏、上段）と近代製作の馬鋏

土の直径六〇cm、高さ二五cm位の石臼に似た道具の上で遊んでいた。それが杓から玄米を取り出す土臼だったと聞かされても理解出来ないまま、何時とはなしに壊れてしまった。実は、大正の頃まで活躍した杓摺機なのである。

冬

雪が降って外仕事が出来なくなる。雪仕事が始まる。縄綱や米俵造りである。絲苧の様に柔くした藁で編んだ縄は菅筵や藁筵の縦糸なのだ。



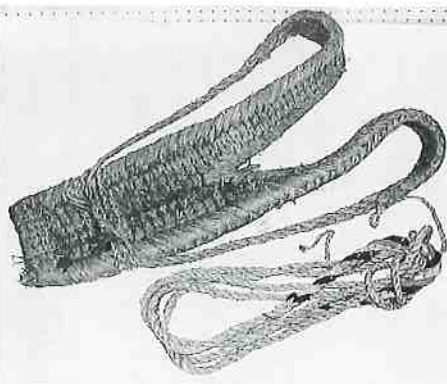
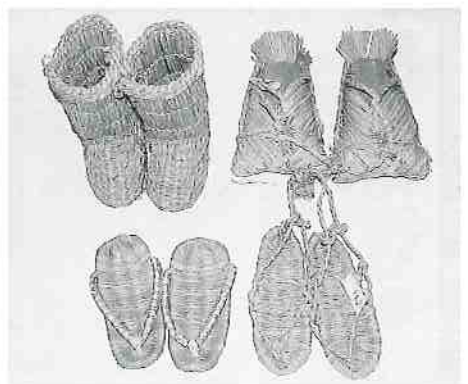
▲ 藁蓑（モデルは筆者、民俗資料館所蔵）

縹（よじること）を強くし藁屑で扱いて強く仕上げないと、筵織りの途中で切れて始末が大変となる。菅筵は茶の間用、藁筵は台所用で、暮の二十八日までに完成しなければならなかった。

この仕事は親よりも大抵先輩から教わる者が多く、筵織子を持って他所の内庭に組み立て、細縄作りから入り浸りで、甘酒や干柿等を振舞って貰っての仕事は百姓仕事としては最高である。ここで良い事悪い事を教わって大人になった。

正月二日の仕事始めは「にいこ」（杓のついていた茎）の叩き始めである。藁蓑・前掛け等の材料になる。暮のうちに藁から抜き取っておき、早朝三時・四時頃から叩くのである。早い程百姓の心意気を表すと競って早くからトントン叩いたものだ。「にいこ」と「ひろろ」（菅の一種か）を持って又先輩の家に行って、色々の藁細工を習った。蓑・雪靴・「ぼんどり」・「ごうむし」（荷担きの道具）・前掛け・草履・草靴等々、農作業に必要な道具は全部自給自足であり、

※いずれも『日本の美術三五七号 古代の農具』（至文堂）より転載



▲ 藁で編んだ品々 ぼんどり（左）と草履・深靴（いずれも民俗資料館所蔵）

農閑期は全部これにあてた。娘達はこの時期師匠に裁縫を習いに行く。その縫いっ子（娘）の帰りを待ち伏せてちよっかい出すのも楽しみの一だった。雪道に落とし穴を作ったり雪玉をぶつけたり：嫁達は裁縫物と依編みにかかりきりの様だった。

春になると

雪がまだあるうちに、苗代地に藁灰を撒き雪溶けを早める。田の神降

の三月十六日過ぎには、「いきどろ餅」(お朔日の雑煮の残りの餅を藁を扇子状に揚げた所へ張りつけ、かちかちに乾かしたものを焼いて食べ、又鋤で田打ちを始める。水を入れて小さく小切る。その時藁前掛けをしても泥水で体が汚れるので、竹で編んだ鬘を掛けて防いだり、下半身はびしょ濡れとなった。明治三十二年(一八九九)に出されたという「蒔幅四尺、その周囲に踏切り及び通路を設くべき事」という訓令通りに、一尺五寸位の溝の土を鋤い上げ短冊を造り、均耕機で幾度も往復し土を軟らかにして板で均して仕上げが、その前に四ツん這いになって前年の稲株を深く埋め込む作業は、冷たく腰の痛い作業であった。この頃天井に吊してあった筋粉(種子)を降ろして、池か堀の水に浸し二週間程経て、暖かい日は陽をくれ(天日で温める事)、又風呂の湯に浸し筵で包み、保温して発芽を促した。今はサーモスタット付き発芽槽で失敗もなく仕上がるが、気苦労の多い作業であった。岡仕事(畑作業)の薯植え、麦包め、菜種の手入等を早く済ませ、田打ちを始めなければ田植に間に合わない。果樹地帯は桃・梨の手入れも忙しく、休む暇もない。手に豆が出来るほどの重労働の田打ちには、刈跡の株を二株づつ重ねる様にして進むのだが一反歩約一万五千株：正に忍耐と根気の作業で、二週間位後には水を入れて細く砕く仕事



▲ 均耕機 (民俗資料館所蔵)

が待っている。百姓とはその様なものと思ひ込み、宿命と諦めながらの忍従の生活にはもう絶対戻れない。精農家はそのうえ一五〇貫(約六〇〇kg)の堆肥を肥籠で運び、田に撒いたものだ。

加茂祭り頃一斉に水掛けとなり、牛馬に依る代掻きと畦塗りが平行して始まる。もう待ったなしの日勘定の作業が続き、目が凹み隈が出来てしまう日々が続く。

夏が来て

さて田植の段取りだが、苗取りでは苗尻に泥が付くか否かで能率が全然違ってくる。反当り三百把位の苗を取らねばならない。十六七人の「結い」か「雇い」又は協同作業だが、一日に一人当り六畝位が普通だった。六月二十日頃からは田の草取りで、四ツん這いになって一日中取



▲ 初期の耕運機を運転する筆者 以後、又鋤の世界へ逆戻りすることはなかった(昭和30年代前半)



▲ 自走式バインダーでの作業 手作業で刈りながら稲を結束する機械。これにより古代から続いた人手だけによる耕種方法から開放された(昭和30年代後半)

り続ける。

一番期は人力除草機で縦横と転がし、二番期の頃はまたしも、三番期・終了期の頃の炎天下、ガツボの菰を背負い、稲の葉から目を守るためサッシの網の様な金網の面を被り、流れる汗を拭く事も出来なかった作業は地獄だった。この間に麦・薯・菜種の収穫、里芋の植え付け、畦に蒔いた萱の草取り等々、自給自足の生活だったため、寸毫の無駄と暇もない過酷な生活が続く。流石八月に入りお盆を迎える頃には、重労働から多少の余裕が出るが、それとて安閑とはしておれない。

秋を迎えて

お盆過ぎには稲架場作りだ。地を均し固めて、稲架樹を枝打ちして傘竹をしっかりと結わい、冬に纏った縄を張り(竹・針金もあった)十十九二段の稲架け場を造った。九月十九日のお祭りを目処に稲刈りを始める。十株位を一把とし、八把を一束と呼ぶ。五株を刈り進む。この一列を一捗と数え、半日で十捗位刈れるのだが、夜明け前は脱穀作業、朝食後は藁の始末(藁には積み)、午後は上げ稲(稲架場からの収納)、午前刈った稲の取り入れ運搬、夜は稲架掛けというこの一連の作業を造り遂げなければと、一家総出で頑張るのだが、「せめて六時間眠りたい!!」というのが、重労働と家事もしながら睡眠五時間にも満たない日々の婦人達の切ない願いだったと聞く。小屋(おやつ)に吾が子に乳を与える刻だけが唯一の休みであり慰めだったと聞かされ、胸詰る思いがする。過酷な泥と芥に塗れる四ツん這いの生業から、一転して今は手袋をして靴を穿いての農業体験者の記録である。

(近世部会 丸山朝雄 田中新田在住)

穀町裏通りの大火



秋房 浅見 丞治

穀町の大火事は昭和に入ってから
の話であるが、大変記憶が薄れてい
るといふ。数えて七十年以上になる
ので無理もないか。

昭和十年五月十二日、その日は朝
から気温が高く東風が強かった。何
となく心のソワソワするような日だ
った。お昼近く「火事だ！」と言
う声。火の見櫓の半鐘の音がけたたま
しい。警報のサイレン、自動車ポン
プのサイレン、ガソリンポンプ車の
輸立の音、騒然としてきた。温かい
不気味な強風が時折ヒューッと音を
立てて吹きまくる。一瞬大火事と誰
の胸にも浮かび又その通りになった。
火は風に押されバリバリと下手穀町
裏へ燃えうつる。そして幅を広げて
いく。消防ポンプも役に立たない。
加茂の町は昔から水利が好く町通り
の辻々にはマンホール型の水溜が造
られ自慢のものであったが、このよ
うな早い火足に遭っては無力だ。そ
れ程風による火勢が強かったのだ
である。本町土手は全体からみても災害
は少なかった。穀町裏はそれこそ大

かも私史

変。川筋沿いは全滅、風が強かった
ので下方へ行くスピードが早く、下
川原・番田地区が焼けたのも瞬く間
だった。火勢は国鉄信越線のレール
の道床で遮られ、レールを越えて空
間が広がったため漸く鎮火したので
あった。枕木に火がついたどうかは
不明。列車は暫く不通だった。
近辺の消防団がポンプを持って応
援にかけつけて下さったがどうにも
手につけられなかったのではないか。
水源が不十分で、放水したのを火災
中見たことがなかった。
八海山行者の決死の火伏せの御祈
禱が大きな話題になった。猛火は一
向に衰えない。番田地区にかかった
時である。駅前通りの表に知野為さ



強風中の加茂大火 午後二時四十分出火し 二百五十余戸全焼

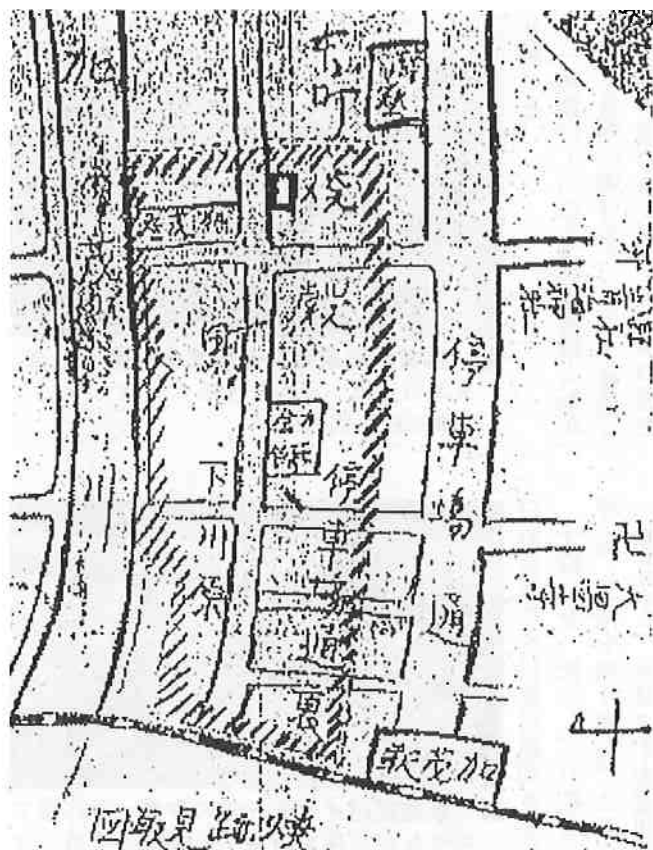
六時漸く鎮火す
赤十字支部救援
▲ 穀町大火を報じる「新潟新聞」号外（昭和十年五月十二日付）

明治四十五年の大火

加茂史上には、いまだ語り継が
れる災害がいくつも存在します。
その中から、明治末年に起きた火
災の記録を新聞から拾ってみます。

一昨夜の八時半頃突如として
加茂町に警鐘起る：折柄の烈風
は愈よ其勢を添え来りて：瞬く
間の上条裏町全部を舐め尽くし、
更に本町続きの上条表通りに突
出し尚ほ三条屋小路を越して新
長屋にまで延焼し、零時五分漸
くにして鎮火したるなり：全焼
二百廿五戸、外に土蔵四棟、半

焼三十一戸：加茂町にては：消
防の準備整え居たるより火事よ
と聞く間もなく何れも甲斐々々
しく出動し死力を尽くして防御
したるが、中に農林学校生徒が
教職員の指揮にて最も規律ある
活動をなしたるは側目に見るも
心地よく、同町警察分署員を始
め一般町民は非常に感謝の意を
表し居たり、更に三条町より消
防一百名の応援あり、尚附近村
落よりも続々応援あり
(明治四十五年四月二八日付「新潟
新聞」より)



▲ 穀町大火の焼失範囲を示す「新潟新聞」記事（昭和十年五月十四日付）

んと言う立派なお店がある。火はこの建物に迫って来た。屋根は杉皮葺きで薪もの小屋のようなもので傍目にはどうぞ燃えて下さいと言わんばかり。ここが焼けると一気に加茂駅の駅舎も焼けることが目に見えてくる。

どよめきがあがった。「おー八海山」。見ると白装束の八海山行者が冠をつけ、長い数珠を首から肩にかけて、東端の棟先に文字通り仁王立ちにより激しい火勢に向かって数珠を押しもみ押しもみ火除けの御祈禱を始めた。体格も良し、その様は芝居

「イシアライ」の思い出



下高柳 笠原ヤブ

私が嫁入りをしたのは、二三歳のときです。その頃、青年会が盛んで、女性は一七歳から二五歳位まで、男性は三〇歳位までの人達が、六〇く七〇人程入っていたでしょうか。終戦直後は、何の娯楽もない時代でし

第二節 補習教育及青年會少女會

本村に於ける青年會は、村内十二部落に於て舊藩政時より各引續きたる若連中を稱する團體を漸次改善して、明治三十四年以降、郡署名を冠したる青年會と稱し、前次修業を目的とする組織に改めたりと雖も、各團體の連繫を統一を見るに至らざりしが、明治四十一年五月、七谷青年協會を組織し、村長其會長となり、從來各部落に存在せる十二の青年會を統率し、並立を始め村治の當局者小學校教員は常に之れが善化啓蒙に努め、各團體も小學校教員指導の下に、農業開墾の季節に夜學會を開き、修身・國語・算術の教科の教授を爲せり。又少年少女の團體としては、婦人會に少女部の設けありしと雖も、小學校を卒業せる子女をして、一定せる規律の下に普く補習教育を受けしめ、以て教育の効果を一層進展するの要切なるを認め、大正五年十月三十一日、天長節の佳辰を下し、青年會と青年教育の統一を村の大會に於て協定し、特に男子の爲に青年學校、女子の爲に少女學校を設けし、男子は年齢十二歳

第十三章 教育

一六六

を見るようだった。見上げる群集の音が喧しい。その祈りが効を奏したか、その場の風の向きが変わり類焼をまぬがれた。そこにいたみんなの息吹は呻きともため息ともつかぬものだった。
罹災された皆様はお気の毒である。元凶は何といっても強い東風である。被害の皆様は有力なお方が多かったので、生活面の要救済の話は耳にしない。
(明治四四年三月二五日生)

たから、青年会の宴会が楽しみみのひとつでした。中でも、十一月十五、十六日の「イシアライ」の楽しさが印象に残っています。「イシアライ」とはどんな字を書くのでしょうか、意味もわかりません。

▲ 大正七年『七谷村村是実行指針』より 集落ごと組織されていた青年会の統合(明治41年)と少女会発足(大正5年)の経緯および理念を説いている

「イシアライ」の準備は十四日から始まりです。この日の夕方、青年会の男女が米・野菜を持ち寄って宿へ届け、足りない材料は、男性が自転車に籠載せて加茂の町まで買い物に出かけました。たいていは、豆腐・牛蒡・肉・魚など、ご馳走の材料を購入したようでした。

七谷村少女會々則
第一章 名譽及組織
第一條 本會は七谷村の女子を以て組織し、事務所を七谷村高等小學校内に設けり
第二章 目的及事業
第一條 本會は女子の徳性向上に努力し、知識を豊富にし、體力を増進し、女子としての本分を全くし、社会に貢献するを以て目的とする
第三條 本會は前條の目的を達せしむるに必要なる行方
一、講 話
二、演 習
三、遊 藝
四、學 術
五、實 験
六、學 術
七、學 術
八、學 術
九、學 術
十、學 術
十一、學 術
十二、學 術
十三、學 術
十四、學 術
十五、學 術
十六、學 術
十七、學 術
十八、學 術
十九、學 術
二十、學 術
二十一、學 術
二十二、學 術
二十三、學 術
二十四、學 術
二十五、學 術
二十六、學 術
二十七、學 術
二十八、學 術
二十九、學 術
三十、學 術
三十一、學 術
三十二、學 術
三十三、學 術
三十四、學 術
三十五、學 術
三十六、學 術
三十七、學 術
三十八、學 術
三十九、學 術
四十、學 術
四十一、學 術
四十二、學 術
四十三、學 術
四十四、學 術
四十五、學 術
四十六、學 術
四十七、學 術
四十八、學 術
四十九、學 術
五十、學 術
五十一、學 術
五十二、學 術
五十三、學 術
五十四、學 術
五十五、學 術
五十六、學 術
五十七、學 術
五十八、學 術
五十九、學 術
六十、學 術
六十一、學 術
六十二、學 術
六十三、學 術
六十四、學 術
六十五、學 術
六十六、學 術
六十七、學 術
六十八、學 術
六十九、學 術
七十、學 術
七十一、學 術
七十二、學 術
七十三、學 術
七十四、學 術
七十五、學 術
七十六、學 術
七十七、學 術
七十八、學 術
七十九、學 術
八十、學 術
八十一、學 術
八十二、學 術
八十三、學 術
八十四、學 術
八十五、學 術
八十六、學 術
八十七、學 術
八十八、學 術
八十九、學 術
九十、學 術
九十一、學 術
九十二、學 術
九十三、學 術
九十四、學 術
九十五、學 術
九十六、學 術
九十七、學 術
九十八、學 術
九十九、學 術
一百、學 術

七谷村少女會々則 大正七年当時の少女會は婦人會の下に置かれ、十二歳以上十七歳未満の女子が在籍した(『七谷村村是実行指針』より)

の全員が宿に集まり、女性はおべ・なますなどの料理を作り、男性はドブ Rok (濁酒) の出来具合を確かめたりして、夕方五時頃になると宴会を開始します。宿の座敷と茶の間をつなげ、借りてきた張り板を並べ、その上に数々の手料理を並べます。ドブ Rok は、一斗桶に七分目位入ったものを二斗造り、飲み明かします。宴が盛り上がるにつれ、歌も出、「八木節」「愛染かつら」「帰り船」など、流行歌を楽しく歌いました。夜も更け、女性には後片付けをし、役員と翌朝のご飯当番は男女別々の部屋にわかれて宿泊をしました。

十六日は、ご飯当番を五、六人残して、全員が朝飯前に、他家の柴担ぎをさせてもらってヒョウトリ(賃

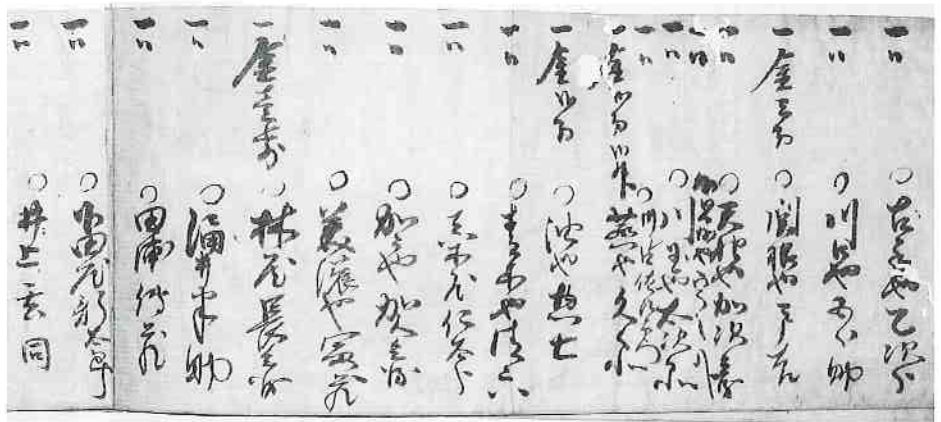
「イシアライ」の後、友達を通して手紙などを受け取る人も出てきます。相手が気に入らなければ返事がないし、気に入れば手紙にある場所へ出かけるわけです。たいていは、橋の上などがデートの場所だったようです。「イシアライ」は、もしかすると「意思を新たにする」という意味だったのかもしれないね。(昭和四年六月十七日生) (岩野筈子筆記)

この商売屋さんは 今どちでしようか

天保十五年（一八四四）の八幡神社本殿建替寄附帳には、上条新町の商売屋さんが多数、寄附者として名前が出ています。今、その家がどちらであるか、分かる家もあれば、不明も多くあります。次の屋号の家々について市民の皆様でお分かりの方はご教えください。

（地名・出身地の屋号）

梅之木仁太郎、中澤屋市右衛門、猿毛屋七之助、村松屋百太郎、天野屋伝五郎、加賀屋喜三右衛門、大國屋惣兵衛、加賀屋新兵衛、金田屋孫右衛門、小国屋喜三右衛門、石田屋権九郎、近江屋彦四郎、越中屋権之丞、駿河屋由右衛門、関根権七、猿毛屋八曾七、川口屋五郎助、関根屋戸吉、天野屋加次兵衛、川玉屋太次兵衛、川口佐次右衛門、燕屋久兵衛、青木屋清六、加賀屋賀兵衛、美濃屋富蔵、林屋長兵衛、下田屋新太郎、井上玄同、三条屋仁五郎、八幡屋六左衛門、田川屋佐忠太、駒岡屋六蔵、小国屋弥八、石倉屋助七、会津屋平助、川口屋五左衛門、伊勢屋忠吉、小日向卯之助、村松屋勇太郎、八幡屋雄平、富山屋与太郎、鶴田屋三左衛門、下条屋仁五郎、保明屋和七、下田屋平蔵、湯川屋七郎兵衛、駿河屋六蔵、山方屋助蔵、青木藤右衛門、鶴田屋乙蔵



▶ 天保十五年八幡神社本殿建替の寄附帳（八幡 小池清彦氏所蔵）

湯川屋七郎兵衛、村松屋茂右衛門、坂田屋弁吉、吉川屋勝蔵、川崎屋久右衛門、真木屋定次郎、真木屋吉次郎、真木屋仁太郎、真木屋庸蔵、真木屋多蔵、真木屋安平

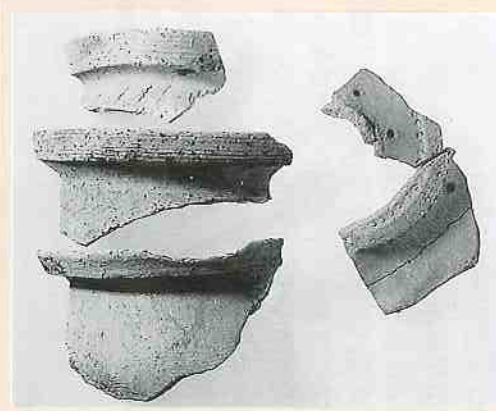
（商売品の屋号）

紙屋伝之助・宇七・清蔵・央七・宇之八・紙裁四郎治、大工奥四郎・久次郎・亀五郎・勘兵衛・勝蔵・六内・

破片は語る

中沢遺跡の弥生土器

中沢遺跡（下条）は、現在までのところ、市内唯一の弥生時代（弥生後期・今から千九百年前頃）の遺跡です。一般的に弥生時代の土器は、縄文時代以来の伝統を残す北方の文化圏（東北地方周辺・県内では下越地方に多く分布）を除き、縄文（縄目文様の装飾）が見られなくなり、代わりに土器表面を板状の工具でこすり取った、磨いたりして滑らかにし、厚さも数ミリと極めて薄く仕上げられます。より機能性（熱の伝導・水漏防止）を重視したつくりです。装飾は、器の口や肩の部分など限られ、櫛の歯状の工具を引いて平行線や波模様、細い管状の工具を突き刺して円や点の模様などを描いています。



小さな破片ですが、弥生人の知恵と美意識を今に伝えます。
（考古・古代・中世部会 尾崎高宏）
◀ 左は煮炊用の甕、右は器台（脚付きの台）。平行線・点・円などの模様が見える。

兼松・金蔵、材木屋名七・勝蔵・五兵衛、古手屋乙次郎、酢屋銀蔵、米屋与五郎・萬吉、鳥屋忠蔵、綿屋長之助、木挽屋善太郎・仁五郎、油屋惣七、桶屋幸蔵、玉屋忠兵衛、味噌屋孫四郎、建具屋源五右衛門、鍛冶屋為蔵・三之丞、屋根草松太郎、綿打大源治・喜源太、髪結善吉・辰五郎、舟乗丑太郎・竹蔵、石切り与市、菓子屋徳左衛門、饅頭屋又吉、染屋勝平、紺屋徳蔵

（近世部会 関 正平）

編集後記

今号も弥生時代から二〇世紀に至る、幅広い記事をお届けすることができました。特に「流れる汗を拭く事も出来」ず、「睡眠五時間にも満たない日々」を綴った丸山稿は、高度成長期以後の見聞しかない者にとっては衝撃的です。貴重な証言をどうぞ御味読ください。

なお、市史編さん室ではあらゆる史資料の提供をお待ちしております。ご協力のほどをお願いします。